

IPD 活動ガイドブック（案）

～技術者のための初期専門能力開発ガイドブック～

Ver.1.1

2025 年 6 月 2 日

公益社団法人日本技術士会研修委員会

IPD ワーキンググループ

目 次

はじめに	1
第1章 IPD 活動と PC の概要	2
1.1 IPD とは	2
1.1.1 IPD の定義	2
1.1.2 IPD の意義	2
1.2 IPD 活動と PC	4
1.2.1 PC が求められる社会的背景	4
1.2.2 エンジニアリングと PC	4
1.3 IPD 活動と支援	6
1.3.1 IPD 活動を実践する環境	6
1.3.2 IPD 活動の期間	6
1.3.3 IPD 活動の実践	6
第2章 PC	7
2.1 IPD 活動の PC	7
2.1.1 PC の分類	7
2.1.2 IPD 活動で獲得する PC	8
2.2 PC 獲得手法のモデル	9
2.2.1 PC 獲得のロープ・モデル	9
2.2.2 ロープ・モデルと PC の 15 要素の関係性	9
第3章 IPD 活動の実践	10
3.1 IPD 活動の実施方法	10
3.1.1 IPD 活動の実践の場と活動者の成長	10
3.1.2 IPD 活動サイクル	10
3.1.3 IPD 活動サイクル途中での実行計画の変更	11
3.1.4 IPD 活動支援者	11
3.1.5 IPD 活動の記録と評価	11
3.2 IPD 活動の具体的内容と記録方法	13
3.2.1 IPD 活動の具体的内容	13
3.2.2 IPD 活動の記録方法	14
【参考資料1】IEA が示す「GA&PC」と日本における「資質能力」	22
【参考資料2】IPD 活動サイクルにおける OODA ループの活用	24
研修委員会 IPD ワーキンググループ(第三期)メンバー一覧	27
研修委員会 IPD ワーキンググループ(第四期)メンバー一覧	28

はじめに

初期専門能力開発（Initial Professional Development、以下、IPD と略す）は、高等教育機関修了時に修得しておくべき能力（Graduate Attributes、以下、GA と略す）を身につけた技術者が、専門職技術者として備えるべき資質能力（Professional Competencies 以下、PC と略す）を獲得するための自律的な活動である。PC 獲得の具体的な到達目標として、技術士や一級建築士などの専門職資格の取得があげられるが、IPD 活動は、広く社会で活躍できる専門職技術者としての能力開発に極めて有効である。

日本技術士会研修委員会 IPD ワーキンググループ（以下、IPDWG と略す）では、文部科学省科学技術・学術審議会技術士分科会の下に発表された「技術士制度における IPD システムの導入について」（2021 年 1 月 8 日）の中で提起された「IPD システム」*1を実現し、IPD 活動を確実なものとする 것을 目的に 2022 年 4 月に「IPD 活動指針（案）Ver.1.0」を作成した。これに続き初期の技術者が専門職技術者としての能力開発に広く取り組めるよう、本活動指針を参考に、IPD 活動と IPD 活動支援を行う際の手引きとなる二つのガイドブックを作成し 2023 年 4 月に公開した（第三期 IPDWG）。多くの技術者が、IPD 活動を行うことにより、高度な専門職技術業務を行うために必要な PC を身に付け、社会で活躍し貢献できる技術者を目指していただくことを願っている。

IPD 活動ガイドブック（案）は、IPD 活動者の立場について記述したものであり、第四期 IPDWG において、第三期 IPDWG 成果の IPD 活動ガイドブック（案）Ver.1.0 を見直し、改訂し IPD 活動ガイドブック（案）Ver.1.1 としたものである。

*1 <IPD 活動指針（案）Ver.1.0 より引用説明（一部改編）>

IPD システムとは、専門職技術者をめざす初期の技術者や高等教育機関を修了した技術者が実施する IPD 活動に対し、所属組織に加え、日本技術士会、高等教育機関、学協会、産業界の関係団体等による教育プログラムの提供と支援、さらにこれらの機関の構成員により社会全体で支援しようとする仕組みである。

第1章 IPD 活動と PC の概要

本章は IPD の定義と意義、IPD 活動と PC、IPD 活動と支援を示す。国内外の情勢変化で生じる複合的な問題を解決するために必要な PC を身に付けることを目的に、IPD 活動者が実践すべき IPD 活動に関する基礎的な事項を述べる。

1. 1 IPD とは

1.1.1 IPD の定義

IPD とは、「高等教育機関で修得した知識基盤の上に、実務を通して自律した実践に必要な PC を獲得し、専門職技術者として成長する過程」と定義する。なお、『高等教育機関で修得した知識基盤』は、高等教育機関と同等の教育機関や自らの取り組みにより修得した同等水準の知識基盤を含むもの（以下、知識基盤と略す）とする。

また、IPD に対する取り組み全般を「IPD 活動」と呼び、IPD 活動に関係する技術者を以下に示す。

<IPD 活動者>

IPD 活動を行う技術者が IPD 活動者（以下、活動者と略す）であり、活動者は具体的には以下のような者が相当する。

- ◆技術士や一級建築士など専門職技術者としての資格取得を目指す技術者
- ◆JABEE 認定課程修了者および技術士第一次試験合格者（修習技術者）
- ◆専門職技術者としての資格取得に相当する能力の獲得を目指す技術者

<IPD 活動支援者>

IPD 活動を支援する技術者・研究者等を IPD 活動支援者（以下、支援者と略す）と呼び、支援者としては以下のような者が相当する。

- ◆技術士など専門職資格を保有する専門職技術者
- ◆学協会等に在籍し専門職技術者として認められる技術者
- ◆高等教育機関において専門職技術者として認められる教員
- ◆職場の上司、先輩社員

1.1.2 IPD の意義

社会基盤や人々の価値観が絶えず変化する中、科学技術分野に従事するすべての技術者には、科学技術の持つ功罪（利便性と弊害）や多様な社会ニーズと達成のための課題を想定し、最新の知識、技術、社会への関心を維持するために継続研さん（生涯学習）が課されている。この継続研さん（生涯学習）の第一歩である IPD の意義について、活動者と支援者の2つの視点で示す。

（1）活動者の視点

第一の意義：

何を学ぶのかと併せて学び続ける必要性と責任を自覚し、自律的で効果的な学びの手順と方法を修得できることである。これは生涯学習の礎となり、最も重要な意義である。

第二の意義：

PC は「社会や他者に見出す力」と「自身の行為から表出させる力」を獲得できることである。すなわち、PC が結果からではなくプロセスから見えることに気づき、IPD を自らの能力開発に効果的に役立つ方法へと進化させる力を身につけられることである。IPD 活動では能力開発の種類や方法、実装の場や手順も一人ひとり異なる。したがって、自らの

ビジョンと目標を設定し、ギャップを分析して開発する能力を特定し、能力開発の進め方を主体的にデザインする必要がある。RPDC を回す活動の中での気づきや評価、適時の計画変更や改善等の試行錯誤⇨省察(reflection)の記録が、専門職としての自律的実践に必要な PC の評価・実証に用いられる。

第三の意義：

PC が知識・スキル・態度・価値観を有機的に結合する行為と省察の繰り返しにより高められると、あらゆる実務や実務以外において専門能力開発の場として活用し PC を意識的にも無意識的にも表出できるようになる。この段階に到達できれば、活動者の行為や言動も変わり、同僚・利害関係者・支援者からの安心と信頼を得ることになる。すなわち、専門職として十分な PC を獲得した段階であり、専門職としての継続研さん（Continuing Professional Development、以下、CPD と略す）につながる。

（２）支援者の視点

第一の意義：

活動者への IPD 活動支援(以下、支援と略す)を行うことにより、科学・技術従事者全体の信頼と尊敬と価値の向上に寄与することができ、支援活動への喜びが醸成される。

第二の意義：

支援プロセスを介して、支援者が若手人材のキャリア形成を手助けし、業務を超えた人材育成モデルとなることが期待される。支援者が大切にすべきことは、活動者の多くが何らかのコンピテンシー教育を受けている状況を理解することや、支援には自らの経験を積み重ね経験値を活動者と共有して実践できるようになるまでは、支援者は手探りの状況であるという謙虚な姿勢が重要である。支援活動では、支援者自身が活動者と同じ手順で自らの CPD 活動の計画を作り、試行錯誤しながら実践するプロセスを見せ、自らの PC の向上と結びつけて示すことが重要である。このような支援活動は、支援者の資質を第三者に示す絶好の機会となるだけでなく、活動者の良き教材となり、信頼の醸成にも大きく寄与する。

1. 2 IPD 活動と PC

IPD 活動は、知識基盤の上に、実務を通して自律しながら実践に必要な PC を獲得した専門職技術者として成長することであり、PC 獲得の過程には知識基盤を強化させることも含まれる。

1.2.1 PC が求められる社会的背景

現代社会を取り巻く様々な環境では、社会的に経験したことのない問題、気づかないかあるいは予知できない問題、発生確率は低いが社会的影響が大きな問題などの中で、複合的なエンジニアリング問題が多々発生している。このような問題に対応し解決するためには、技術だけでなく本質の理解や独創性などが求められている。専門職技術者は、このような複雑で複合的なエンジニアリング問題を解決に導くことで、より良い社会の実現に貢献することができる。さらに、国際化の進展に伴い、専門職技術者は国際的な同等性を示すことが求められている。図 1.1 に技術者を取り巻く現代社会と複合的なエンジニアリング問題のレンジを示す。

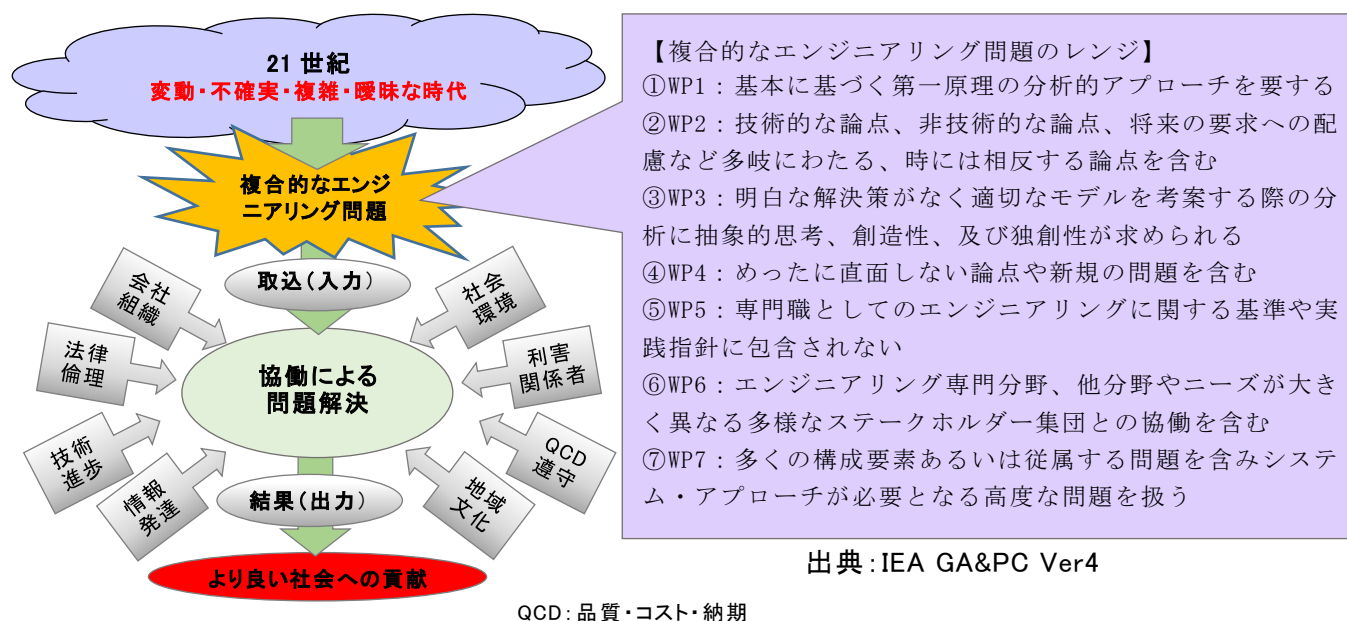


図 1.1 技術者を取り巻く現代社会と問題解決のステップ^{*2}

1.2.2 エンジニアリングと PC

(1) エンジニアリングとは

エンジニアリングとは、科学技術を実用化し、より良い社会を構築するための技術であり、専門職技術者が行うエンジニアリング活動は、数学、自然科学などを基本とする工学的な知識、技術、および手法を駆使し目的を達成することである。また、不確定な状況においても最大限の効果が期待される解決策や、社会的便益をもたらすことが求められるが、エンジニアリング活動により構築した成果物が社会に悪影響をもたらす可能性もあることから、以下の事項に留意する必要がある^{*3}。

^{*2} IPD 活動ガイドブック第 1 版（IPD 研究会）より引用

^{*3} エンジニアリングの定義は以下をもとに一部改編したものである。

IEA GA&PC 第 4 版翻訳、p.2、p.6、GA&PC 翻訳委員会

https://www.engineer.or.jp/c_topics/008/attached/attach_8620_1.pdf

- 責任と倫理観を持って実践する
- 利用可能な資源を効率的に使用する
- 経済面を考慮する
- 公衆の健康と安全を守る
- 持続可能な環境・社会と調和する
- システム全体のライフサイクルにおいてリスクマネジメントを実施する

(2) PC とエンジニアリングの関係性

前項 1.2.1 で示した複合的な問題をエンジニアリングにより解決するためには、知識・スキル・態度・価値観が有機的に結合することを通して、行為として表出する能力、PC が求められる。国際エンジニアリング連合（International Engineering Alliance、以下、IEA と略す）では、プロフェッショナルエンジニアが有する業務経験や、SDGs の観点、文化的な価値への理解、継続的な自己研さんなどにより培われる PC としている。

(3) 必要とされる PC

活動者が獲得すべき PC は、IEA を基に国際的な同等性を担保し、日本の特徴を生かした 3 区分に分類した 15 要素とする。この 15 要素は、文部科学省・技術士分科会の『技術士に求められる資質能力（コンピテンシー）』^{*4}や日本技術士会の『修習技術者に求められる資質・能力』（修習技術者のための修習ガイドブック第 3 版^{*5}、以下、修習ガイドブックと略す）を包含している。「IEA の PC」「IPDWG が提示する PC の 15 要素」「文部科学省のコンピテンシー」をまとめて図 1.2 に示す。

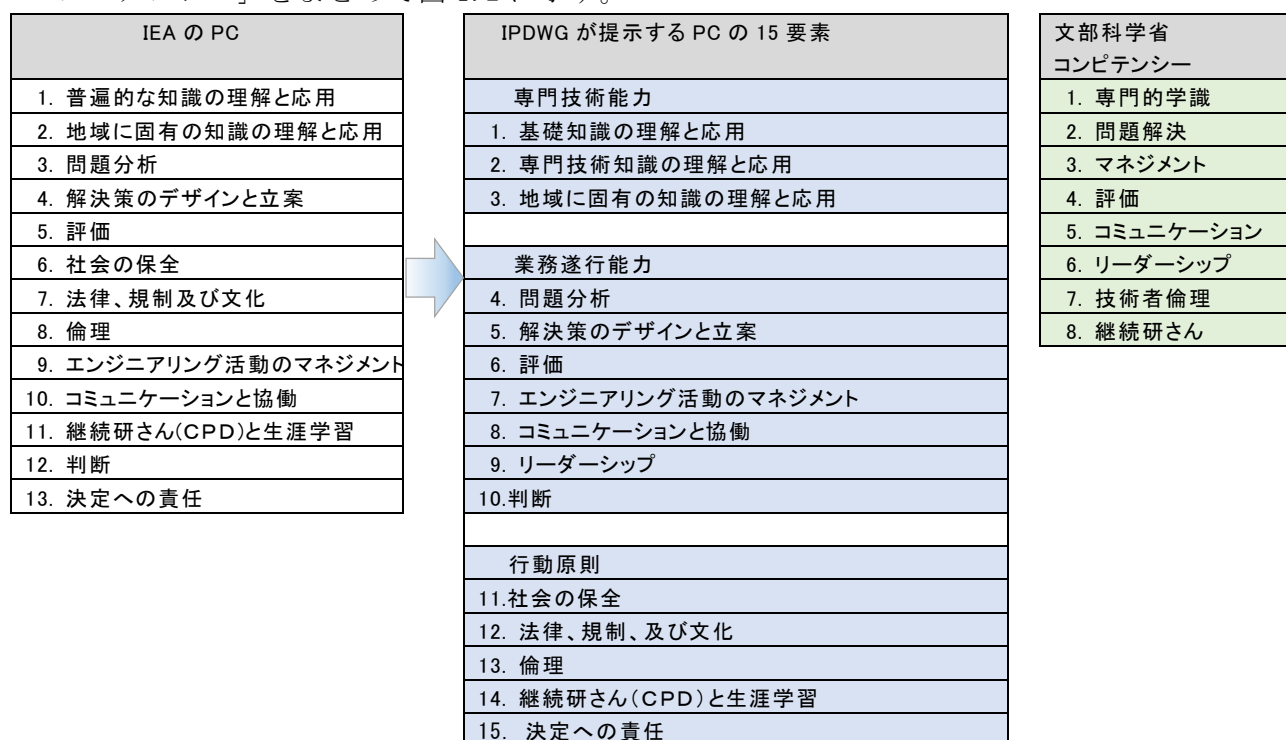


図 1.2 IEA や IPDWG の PC と文部科学省の技術士コンピテンシー^{*6}

^{*4} 第 11 期技術士分科会における技術士制度改革の検討報告 令和 5 年 1 月 別紙 2
https://www.mext.go.jp/content/20230202-mxt_kiban02_000027386_02.pdf

^{*5} https://www.engineer.or.jp/c_topics/003/attached/attach_3637_1.pdf

^{*6} IPD 活動ガイドブック第 1 版（IPD 研究会版）より引用し一部改編

1. 3 IPD 活動と支援

IPD 活動は、CPD の一部でもあり、PC を獲得した専門職技術者として業務を遂行する。また、IPD 活動を効果的に実践するために支援者の存在がある。

1.3.1 IPD 活動を実践する環境

IPD 活動により PC を適切かつ早期に獲得するためには、業務を通じた活動（OJT）や学協会や社会などを含めたより広い環境の中で活動すること（Off-JT）が有効である。社会における活動環境としては、地域コミュニティ、NPO 団体、ボランティア団体等、社会全体の活動環境を利用することが有効である。

図 1.3 に IPD 活動を実践する環境のイメージを示す。

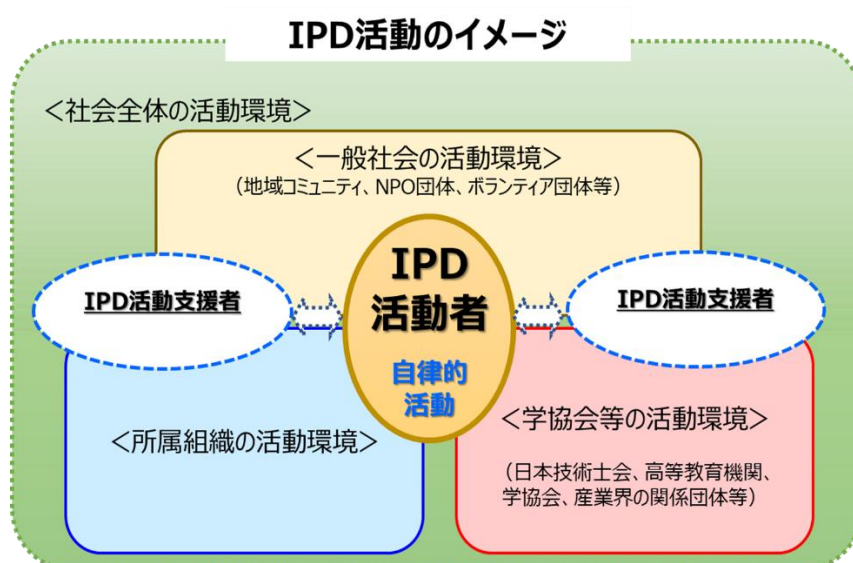


図 1.3. IPD 活動を実践する環境

1.3.2 IPD 活動の期間

IPD 活動の期間を定める。以下に活動の期間を示す「活動の開始」と「活動の終了」を定める。

＜活動の開始＞

IPD 活動は、自ら技術業務に就き、優れた技術者になろうと意識した時点が開始時期である。その時期は、所属企業において専門技術部門に配属されたときや、自らの意思で各種学協会や団体に所属したときなどが考えられ、何らかの支援を受けられる状況にあることが求められる。

＜活動の終了＞

IPD 活動は、PC を獲得して自律的に PC を強化できるようになり、支援を必要としなくなったときに終了する。この自律的な PC の強化が専門職技術者の CPD である。

1.3.3 IPD 活動の実践

IPD 活動において、業務を通じて繰り返し（RPDC サイクル：第 3 章 図 3.2 参照）実践し、PC を強めることが重要である。これを IPD 活動サイクルと呼び、第 3 章で具体的に説明する。また、IPD 活動を実践する際には、知識基盤を強化させながら、PC を獲得していくことが必要である。

第2章 PC

本章では IPD 活動の PC について述べる。活動者が専門職技術者へ成長する活動の取り組みについて説明する。

2. 1 IPD 活動の PC

本節では、専門職技術者に求められる PC について具体的に説明する。

2.1.1 PC の分類

専門職技術者として必要な PC の要素を、「専門技術能力」「業務遂行能力」「行動原則」の3つに分類して設定する。

コンピテンシーの概念が社会で広く認知されるようになってきた。社会からの期待に応える専門職技術者として成長するためには、以下に示す4つの視点^{*7}が必要である。

- ◆社会的責任を果たすための視点
- ◆社会のニーズに的確に対応するための視点
- ◆業務遂行に必要な能力の向上を図るための視点
- ◆社会からの信頼と尊敬を得るための視点

この視点は、「基礎・専門知識とスキル」「価値観や行動特性」「他者・社会との関係性に基づく対応力」の3つの括りに整理できる。

この3つの括りに対応するものとして、日本技術士会が提唱している3つの基本修習課題「専門技術能力、業務遂行能力、行動原則」があり、専門職技術者として必要な PC の要素をこれら3つに分類して設定する。

【専門技術能力】

当業務の遂行に必要な専門技術（基礎を含む）および、その応用に関する能力である。具体的には、「大学等、理工系学部 4 年修了程度の基礎的な技術知識を修得し、理解する」、「担当業務を自律して遂行できる技術知識を習得し、経験を積む」ことが求められる。

【業務遂行能力】

業務遂行に必要な能力である。具体的には、「定めた目標を達成するための活動計画を作成し、活動する」、「定めた目標を達成するために、リーダーシップを発揮し、マネジメントする」、「担当業務の遂行に必要な意思疎通を行う」ことが求められる。

【行動原則】

社会的に責任があり、法律を遵守し、倫理規範に基づき意志決定する能力である。具体的には、「担当業務の遂行に係わる法規を理解し、遵守する」、「倫理観を備え、担当業務を遂行する過程で倫理的判断を行い、その責任を負う」ことが求められる。

^{*7}「技術士を目指した修習のあり方について」（日本技術士会 2007 年 7 月 4 日）を一部改編
https://www.engineer.or.jp/c_topics/000/000013.html

2.1.2 IPD 活動で獲得する PC

1.2.2 で示した以下の PC の 3 分類 15 要素を、IPD 活動において習得すべき評価可能な PC として提示し、その内容を合わせて示す。

表 2.2 PC の 15 要素と内容*⁸

分類	No	PC の要素	PC の内容
専門技術能力	IP1	基礎知識の理解と応用	数学、自然科学および社会科学の原理原則的な知識を理解し、応用すること
	IP2	専門技術知識の理解と応用	優れた実践を支える、広く適用されている原則に関する高度な技術を理解し、応用すること
	IP3	地域に固有の知識の理解と応用	実践に取り組む国・地域に固有の優れた実践を支え、広く適用されている原則に関する高度な知識を理解し、応用すること
業務遂行能力	IP4	問題分析	複合的な問題を、必要に応じてデータ・情報技術を活用して定義し、調査し、分析すること
	IP5	解決策のデザインと立案	複合的な問題に対して、多角的な視点に考慮し、ステークホルダーの意見を取り入れながら、解決策をデザインあるいは立案すること
	IP6	評価	複合的な活動について、成果とインパクトを評価すること
	IP7	エンジニアリング活動のマネジメント	一つ、ないし複数の複合的な活動について、その一部または全てのマネジメントを担うこと
	IP8	コミュニケーションと協働	あらゆる活動のプロセスで、複数メディアを用いて、幅広いステークホルダーと明確かつ包摂的にコミュニケーションを行い、協働すること
	IP9	リーダーシップ	業務遂行にあたり、明確なデザインと現場感覚を持ち、多様な関係者の利害等を調整しとりまとめること
	IP10	判断	複合的であることを認識し、競合する要求や知識の不完全さに照らして代替案を評価すること。全ての複合的な活動のプロセスにおいて、健全な判断を行うこと
行動原則	IP11	社会の保全	複合的な活動について、予測可能な経済的、社会的、環境的影響を認識し、持続可能な成果の達成を目指すこと
	IP12	法律、規制、及び文化	あらゆる活動のプロセスにおいて、法律、規制、文化的要件を満たし、公共の衛生と安全を守ること
	IP13	倫理	倫理にかなった方法で活動を遂行すること
	IP14	継続研さん(CPD)と生涯学習	CPD 活動を行い、PC を維持・向上させ、新しい技術と絶えず変化し続ける仕事の性質に適応する能力を高めること
	IP15	決定への責任	複合的な活動の一部、ないし全てについて、決定を下す責任を負うこと

*⁸ IPD 活動ガイドブック第 1 版 (IPD 研究会) より引用し一部改編

2. 2 PC 獲得手法のモデル

本節では、PC 獲得手法をロープ・モデル^{*9}を適用させる。

2.2.1 PC 獲得のロープ・モデル

ロープ・モデルは、「知識」、「スキル」、「態度・価値観」の3つのロープを要求や課題に対応するために結集され、織り合わされ、「コンピテンシー」として世界や他者と関わる能力に繋がることを示している。「行為」が人々のニーズを満たし、経済を発展させ、社会にサービスを提供するために不可欠なエンジニアリング活動に繋がる。PC 獲得は修了生としての知識・能力（GA）を基盤として実施する。図 2.2 に PC 獲得のロープ・モデルを示す。

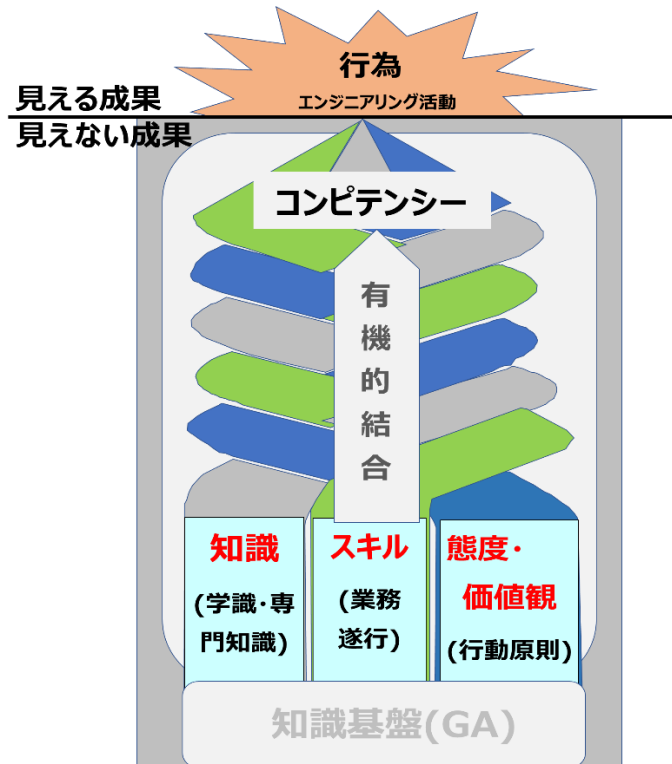


図 2.2 PC 獲得のロープ・モデル

2.2.2 ロープ・モデルと PC の 15 要素の関係性

「知識」、「スキル」、「態度・価値観」の3つのロープは、表 2.2 に示す PC の 15 要素に關係する。具体的に、下記のように關係する。

- ・知識のロープは、PC の 15 要素の「専門技術能力」に該当する
- ・スキルロープは、PC の 15 要素の「業務遂行」に該当する
- ・態度・価値観ロープは、PC の 15 要素の「行動原則」に該当する

なお図 2.2 の PC 獲得のロープ・モデルでは、ロープ・モデルの知識を知識（学識・専門知識）と記したのは、「表 2.2 PC の 15 要素と内容」の専門技術能力がそれぞれ「知識の理解と応用」であるので、ここでは専門技術能力を学識・専門知識とした。

^{*9} 「日本の大学におけるコンピテンシー・ベース教育の現状と課題」、松下佳代、2021 年度技術士全国大会 70 周年記念大会 第 4 分科会講演資料、2021 年（令和 3 年）11 月 25 日
<https://www.engineer.or.jp/cpd/pecpd/movie/?p1=818>

第3章 IPD 活動の実践

3. 1 IPD 活動の実施方法

3.1.1 IPD 活動の実践の場と活動者の成長

IPD 活動には業務を通じて行う活動（OJT）と、業務以外で行う活動（Off-JT）があり、双方をバランスよく組み合わせることで効果的な IPD 活動を実践することができる。この OJT と Off-JT では共に IPD 活動の成果を表出させ、PC の向上を示すことが求められる。

IPD 活動の「リソース」は活動環境（図 1.3 参照）の中に多岐にわたり存在しており、所属組織の同僚や関係者からのアドバイス、本や雑誌、インターネット、オープン/遠隔学習資料、講演などが含まれる。これらのリソースによる IPD 活動には、学協会や教育機関等を通じて行われる活動、および社会活動への参画など活動者が独自に行う活動も含まれている。

活動者は、上記のように活動環境、業務上・業務外などの実践の場で、様々な活動のリソースを活用して IPD 活動を行い、自己成長を達成することが可能である。図 3.1 に OJT と Off-JT による活動者の成長イメージを示す。

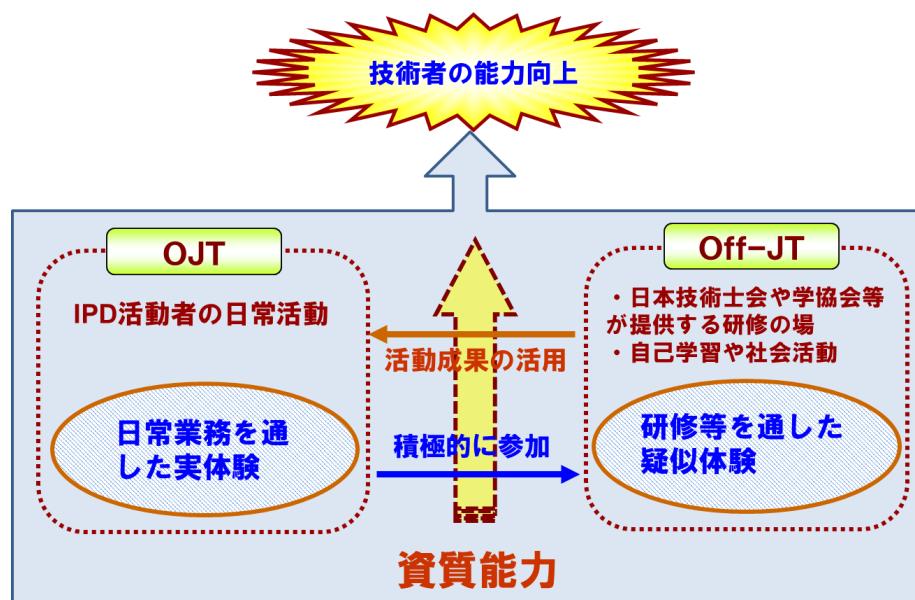


図 3.1 OJT と Off-JT による IPD 活動者の成長イメージ

3.1.2 IPD 活動サイクル

IPD 活動は、前項の OJT や OFF-JT を通じ、RPDC サイクル：IPD 実行計画のレビュー（Review：R）→新たな計画（Plan：P）→IPD 活動（Do：D）→評価・省察（Check：C）を繰り返しながら、PC を獲得し高める活動である。IPD 活動を始めるに当たっては、以下の手順で進める。

- ①過去の実績から現時点での自己の PC の要素を評価・省察し(C)、不足 PC を把握(R)
- ②不足する PC の要素を向上させるための IPD 実行計画を作成(P)
- ③IPD を実行し、IPD 活動内容・成果を記録(D)
- ④活動結果と成果から PC の獲得状況について再評価し省察(C)
- ⑤実行計画をレビュー(R)
- ⑥レビューを元に新たに実行計画書を作成(P)

このように、RPDC を繰り返し、PC の獲得、さらに PC の向上を目指す。
IPD 活動サイクルは、1 サイクル＝「OJT にて取り組む業務の実施期間」が基本となるが、複数業務で取り組む場合もあり、1 年間を一つの目安として良い。図 3.2 に IPD 活動サイクルを示す。

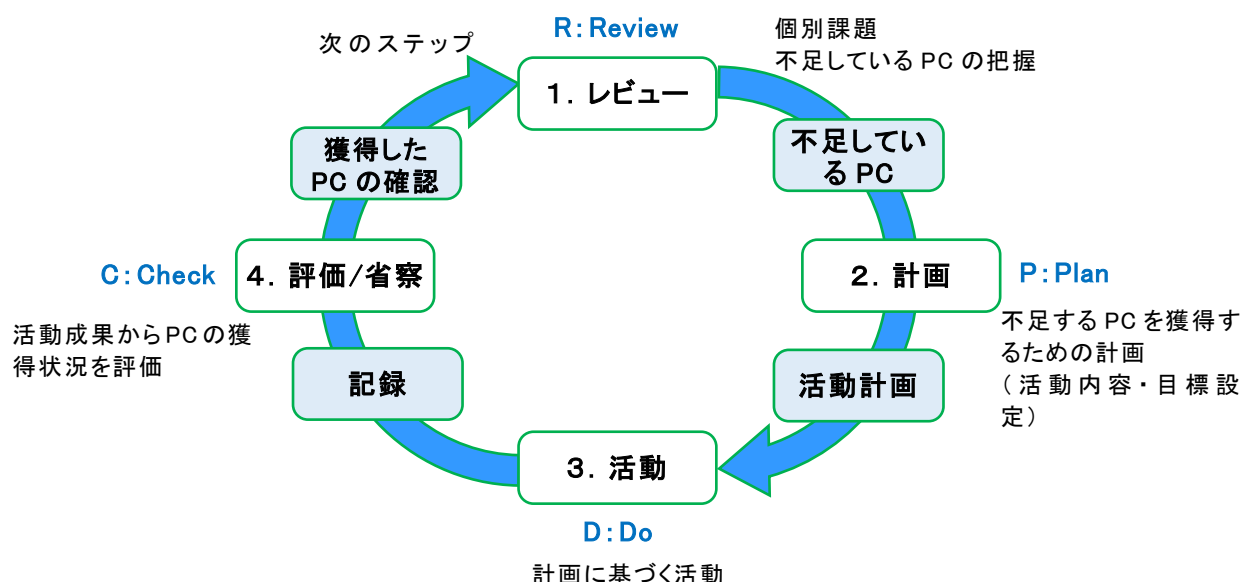


図 3.2 IPD 活動サイクル^{*10}

IPD 活動サイクルの各ステップに、OODA（観察；Observe、情勢判断・行動の方向付け；Orient、意思決定；Decide、行動；Act の略）ループを活用することで、早期に PC に繋がる。

OODA ループは、変化にいち早く対応して対策に取り組むための方法で、ビジネス界では広く用いられており、IPD 活動サイクルへの適用方法を参考資料 2 に提示する。

3.1.3 IPD 活動サイクル途中での実行計画の変更

IPD 活動サイクルの途中で、最初の計画が変わった場合、変更内容を記録し、レビュー、計画、活動、評価・省察を実施する。

3.1.4 IPD 活動支援者

活動者は、PC を獲得するために、IPD 活動サイクルの中で支援者からの支援を得ることが出来る。支援は活動者からの依頼により支援者との対話により行われ、活動者は対話の結果を IPD 活動の記録として残す。

3.1.5 IPD 活動の記録と評価

(1) IPD 活動の記録

IPD 活動の記録は、活動成果を自己評価し、不足している PC を獲得する必要がある。また、支援者との対話において、情報共有のために IPD 活動の記録を使用する。

^{*10} IPD 活動ガイドブック第 1 版（IPD 研究会）より引用し一部改編

（２）IPD 活動の評価

IPD 活動の評価は、まず活動者が自己評価を行い、次に支援者が評価を確認し、対話により合意を図るという手順で進める。

PC は、以下の 3 段階で包括的に評価する。

水準 3：知識・スキル等を身につけ複合的な問題について自ら取り組み解決できる。

水準 2：知識・スキル等を身につけ複合的な問題について支援を受けながら業務を遂行できる。

水準 1：知識・スキル等が不十分な段階であり、複合的な問題について努力を要する。

この PC の評価に合わせて、GA の保有・強化の確認を行うことが望まれる。

なお、上記に示した 3 つの段階の水準を、PC の要素を用いたレーダーチャートに表すことで、過不足が分かり易くなる（次節参照）。

3. 2 IPD 活動の具体的内容と記録方法

3.2.1 IPD 活動の具体的内容

前節 3.1 の内容を取りまとめ、OODA ループを活用した IPD 活動の内容を表 3.1 に示す。

表 3.1 IPD 活動の内容*11

		IPD 活動サイクル(RPDC サイクル)			
		活動のレビュー (Review)	活動計画の立案 (Plan)	活動の実践 (Do)	活動成果の評価・ 省察 (Check)
OODA ループ	観察 (Observe)	・GA 確認 ・業務経歴 ・OJT、OFFJT の記録 ・不足能力	・レビュー結果 ・活動環境の整理 (OJT、OFFJT の場所・時間・費用)	・活動順序	・実践内容の記録 ・OJT、OFFJT の記録 (場所・時間・費用) ・保留・キャンセルになった活動計画 ・活動計画にはなかった活動成果
	情報判断・ 方向付け (Orient)	・保有する PC 要素の自己評価 (レーダーチャート/活動シート)	・PC 要素の習得順序 ・短期・長期 ・実現性 ・容易性	・具体的な 5W1H ・計画の変更理由	・PC 要素の習得達成に関する自己評価 (レーダーチャート/活動シート)
	意思決定 (Decide)	・習得すべき PC 要素	・活動順序の決定 ・活動計画作成 (活動シート)	・習得した PC 要素 ・実践内容の記録 (活動シート)	・活動計画と自己評価の比較 ・活動成果に関する明確な自己評価
	行動 (Act)	・支援者との対話 ・習得すべき PC 要素 (レーダーチャート/活動シートの適宜訂正)	・支援者との対話 ・活動順序の変更等 (活動シートの適宜訂正)	・支援者との対話 ・不足している PC 要素の確認 (活動シートの適宜訂正)	・支援者との対話 ・入出力の記録の確認 ⇒ 検討漏れ、勘違いがないか ・対話内容の記録 ・活動の成果・省察まとめ ・新たな気づきと課題の整理 (レーダーチャート/活動シート)
留意点		2 回目以降は、PDC について見直しを行い、次の PDC の改善に繋げる	・状況変化への対応 ⇒ 活動計画の見直し ・実効性のある計画 ・無理のない計画	・状況変化への対応 ⇒ 活動計画の見直し	省察結果を次のレビューに繋げる

活動のレビュー時および活動成果の評価時において、PC の要素の保有状況をレーダーチャートで示すことで、自身の置かれた状況を可視化することができる。

このレーダーチャートの例を図 3.3 に示す。

*11 IPD 活動ガイドブック第 1 版 (IPD 研究会) より引用

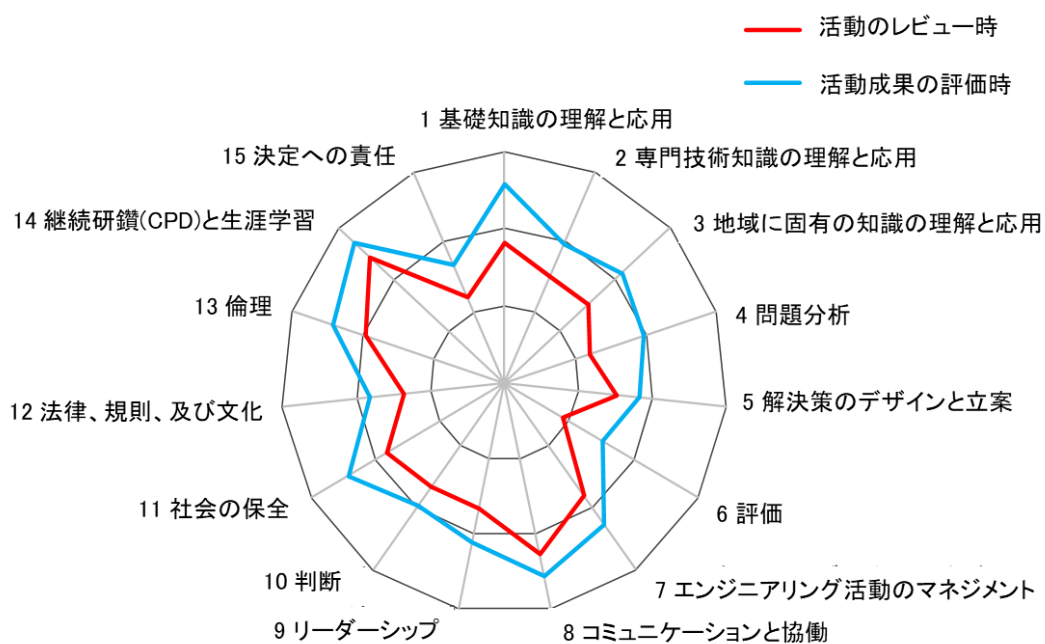


図 3.3 PC の要素のレーダーチャート^{*12}

3.2.2 IPD 活動の記録方法

IPD 活動を記録する方法の一例として、表 3.2 に「活動シート（事例 1；建設系）」を、表 3.3 に「活動シート（事例 2；機械系）」を示す。

この表は、技術分野や部門によって記述内容は異なってくるが、列タイトルに示した課題と、活動前のレビュー、活動計画の立案、活動の実践、活動成果の評価・省察、活動後のレビューは、共通するものである。

^{*12} IPD 活動ガイドブック第 1 版（IPD 研究会）より引用し一部改編

表 3.2 活動シート(事例 1;建設系)*13

2024 年度 (1/1)

課題		活動前のレビュー (Review)			活動計画の立案(Plan)		活動の実践(Do)	活動成果の評価・省察(Check)		活動後のレビュー (Review)		
		水準 1	水準 2	水準 3	月/日	計画内容	実践内容	月/日	評価・省察内容	水準 1	水準 2	水準 3
業務	〇〇道路の設計 (幹線●級●号線)		○		04/03	・契約書(仕様書)に即した図面や計算書の作成を OJT・Off-JT にて習得する。	・数量計算書、設計内容の作図について、社内照査技術者からの確認を受けながら作成した。	12/22	・納品前の設計照査で一部修正が必要になり、時間外対応で工期に間に合わせた。 ・縦横断測量データから道路線形を計画する技術が身についた。			○
強化 したい PC の 要素	専門技術知識の 理解と応用	○				・交通量・地質・測量データから道路設計を行う。	・社内で保管している日本道路協会の道路構造令、防護柵設置基準、道路舗装要綱、〇〇県道路工事設計基準を参考にしながら計算書・図面を作成した。		・設計照査時点で埋設管と道路排水構造物との干渉を指摘され、納品前に手直しができた。特殊な部分は断面を考慮することで施工に入った時の施工リスクを低減できるということを覚えた。		○	
	解決策のデザイン と立案		○			・業務の準備から成果品納入までの工程や必要な協議などを漏れなく想定する。	・発注者へ提出する〇〇道路の設計に関する実施計画書を作成した。 ・必要経費や業務工程については、上司と相談しながらバーチャートに反映して作成した。		・発注者から占用企業者の事前調査漏れを指摘され、実施計画書を手直した。		○	
	リーダーシップ		○			・主担当として発注者との設計協議、占用企業者の管路埋設位置協議を実施計画に合わせて調整する。	・占用企業者それぞれの事情について、上司のサポートで認識できた。		・占用企業者の立場や置かれた状況について知ることができた。 ・次回からは上記に関するリスクを重視して業務を進めていきたい。		○	

*13 IPD 活動ガイドブック第 1 版 (IPD 研究会) より引用

課題		活動前のレビュー (Review)			活動計画の立案 (Plan)		活動の実践 (Do)		活動成果の評価・省察 (Check)		活動後のレビュー (Review)		
		水準 1	水準 2	水準 3	月/日	計画内容	実践内容	月/日	評価・省察内容	水準 1	水準 2	水準 3	
	コミュニケーション と協働		○			・発注者、測量会社、地質調査会社、協力会社、の各担当や上司と良好で確実な協議・相談により業務を進める。	・発注者とはメールに図面を添付し、電話でも確実に着信確認を行って良好に業務を進めることができた。 ・調整内容は議事録にして 1 週間以内に発注者の確認を受けた。		・占用企業者の〇〇の埋設位置がなかなか決まらず、想定外に時間を要した。 ・占用企業者がスムーズに位置を提案できるように、調整会議の方法と位置決めしやすい作図を工夫したい。			○	
			○			・協議先が追加になったため、説明資料を作成する。	・景観審議会に提出する説明資料が追加となり、パースに表現する内容をまとめて外注した。		・無事に審議会に報告ができた。			○	

水準3: 知識・スキル等を身につけ複合的な問題について自ら取り組み解決できる。

水準2: 知識・スキル等を身につけ複合的な問題について指導を受けながら業務を遂行できる。

水準1: 知識・スキル等が不十分な段階であり、複合的な問題への取り組みについて努力を要する。

表 3.3 活動シート(事例 2;機械系)*14

2024 年度 (1/1)

課題		活動前のレビュー (Review)			活動計画の立案(Plan)		活動の実践(Do)	活動成果の評価・省察(Check)		活動後のレビュー (Review)		
		水準 1	水準 2	水準 3	月/日	計画内容	実践内容	月/日	評価・省察内容	水準 1	水準 2	水準 3
業務	〇〇装置の仕様書作成	○			04/03	ユーザーニーズを基に仕様書作成を学習	・仕様書の作成の指導を受ける ・要求処理能力をもとに自分で動力計算を行うこと	12/22	・上司の指導を受けて作成完了 ・機械力学を活用して自分で動力計算を行った		○	
	〇〇装置の設計		○			計画図を基にして図面作成	・上位者の指示により日程通り製作図面を作成 ・CAD を活用し部品の干渉がないか確認すること		・全体の約 50%を作成。他の50%は同僚に指示して完了 ・同僚に指示する場合は必ず部品干渉がないことを確認した			○
強化したい PC の要素	問題分析	○				〇〇装置耐久試験実施	試験計画書に基づき試験を実施 ・ひずみゲージの貼り方を学ぶ		・上位者の指示に基づき試験の補助を担当した ・専門メーカーの講習会を受講してひずみゲージの貼り方を学んだが理解不足のため、エラーデータを全体の 5 %出してしまった	○		
	コミュニケーションと協働		○			部品メーカーとの調整	・上司の指導のもと、〇〇装置仕様書に基づいた部品の仕様書を計画 ・油圧機器メーカーとの窓口を担当する		・上司の指導のもと、部品の仕様書を計画中 ・上司が作った油圧回路を理解し油圧シリンダの要求仕様を上司と意見調整中。		○	
		○				部品メーカーへの品質監査	・社内基準の品質監査項目の理解度向上		・品質監査項目を理解のため、上位者の指示のもと、品質監査	○		

*14 IPD 活動ガイドブック第 1 版 (IPD 研究会) より引用

課題		活動前のレビュー (Review)			活動計画の立案(Plan)		活動の実践(Do)		活動成果の評価・省察(Check)		活動後のレビュー (Review)		
		水準	水準	水準	月/日	計画内容	実践内容	月/日	評価・省察内容		水準	水準	水準
		1	2	3							1	2	3
									に同行した				
			○			学協会の講習会に参加(1回/月) (OFFJT)	・日本技術士会修習技術者支援委員会 5 月 研修会(問題分析能力テーマ)に参加した		・FTA の手法を理解した				○
	解決策のデザイン と立案	○				特許資料の閲覧	・〇〇装置の構造が他社の特許に抵触してい ないかを調査		・特許管理を担当する部門と一 緒に話し合って調査した		○		
	リーダーシップ	○				自社工場の製作現場への対応	・自社工場の製作現場での図面不具合による トラブル対応		・図面不具合が1件発生し、製作 現場で改善指示をおこなった			○	
	基礎知識の理解と 応用	○				材料力学の知識向上(OFFJT)	・材料力学の問題集を購入し2か月で読み解 く		・2か月で読み解くことができた			○	
	社会の保全		○			会社社宅の共同清掃に参加	・毎月参加		・毎月参加				○

水準 3: 知識・スキル等を身につけ複合的な問題について自ら取り組み解決できる。

水準 2: 知識・スキル等を身につけ複合的な問題について指導を受けながら業務を遂行できる。

水準 1: 知識・スキル等が不十分な段階であり、複合的な問題への取り組みについて努力を要する。

【参考資料 1】：IEA が示す「GA&PC」と日本における「資質能力」

（１）GA（Graduate Attributes）のプロフィール

IEA では、「PC を獲得するために必要な知識・能力」について、ワシントン・アコードでエンジニアに必要な GA (Graduate Attributes) として以下に示す 11 項目を提示している。

WA1：エンジニアリングの知識

WA7：倫理

WA2：問題分析

WA8：個人とチームによる協働作業

WA3：解決策のデザイン/立案

WA9：コミュニケーション

WA4：調査研究

WA10：プロジェクト・マネジメントと財務

WA5：ツールの活用

WA11：生涯継続学習

WA6：エンジニアと世界

参考文献：IEA/GA&PC 第 4 版翻訳、p.13～15、GA&PC 翻訳委員会

（２）PC のプロフィール

IEA では、評価可能な PC として以下に示す 13 項目を示している。

① EC1：普遍的な知識の理解と応用

⑦ EC7：法律、規制、および文化

② EC2：地域に固有の知識

⑧ EC8：倫理

(local knowledge) の理解と応用

⑨ EC9：エンジニアリング活動の
マネジメント

③ EC3：問題分析

⑩ EC10：コミュニケーションと協働

④ EC4：解決策のデザインと立案

(Design and development of solutions)

⑪ EC11：継続研さん（CPD）と生涯学習

⑤ EC5：評価

⑫ EC12：判断

⑥ EC6：社会の保全

⑬ EC13：決定への責任

参考文献：IEA GA&PC 第 4 版翻訳、p.16～17、GA&PC 翻訳委員会

（３）文部科学省が示す「技術士に求められる資質能力（PC）」

文部科学省（以下、文科省）の技術士分科会は、2014 年 3 月 7 日に「技術士に求められる資質能力（PC）」を発表し、継続研さんを行うことを前提に 7 つのキーワードを設定した。さらに、『IEA GA&PC 第 4 版』の発行を踏まえ、継続研さんをキーワードに追加して改訂した（2023 年 1 月 25 日）。表-参 1 に改訂した内容を示す。

表-参 1 技術士に求められる資質能力(PC)

（前文）技術の高度化、統合化や経済社会のグローバル化等に伴い、技術者に求められる資質能力はますます高度化、多様化し、国際的な同等性を備えることも重要になっている。

技術者が業務を履行するために、技術ごとの専門的な業務の性格・内容、業務上の立場は様々であるものの、(遅くとも)35 歳程度の技術者が、技術士資格の取得を通じて、実務経験に基づく専門的学識及び高等の専門的応用能力を有し、かつ、豊かな創造性を持って複合的な問題を明確にして解決できる技術者(技術士)として活躍することが期待される。

技術士に求められる資質能力(コンピテンシー)については、国際エンジニアリング連合(IEA)が定める「修了生としての知識・能力(GA; Graduate Attributes)と専門職としてのコンピテンシー(PC; Professional Competencies)」に準拠することが求められている。り「GA&PC の改訂(第 4 版)」が行われ、国際連合による

持続可能な開発目標（SDGs）や多様性、包摂性等、より複雑性を増す世界の動向への対応や、データ・情報技術、新興技術の活用やイノベーションへの対応等が新たに盛り込まれた。

技術士制度においては、IEA の GA & PC も踏まえ技術士試験や CPD（継続研さん）制度の見直し等を通じ、我が国の技術士が国際的にも通用し活躍できる資格となるよう不断の制度改革を進めている。

このたびの「GA & PC の改訂（第 4 版）」を踏まえた「技術士に求められる資質能力（コンピテンシー）」をキーワードに挙げて以下に示す。これらは、SDGs の達成や Society5.0 の実現に向けた科学技術・イノベーションの推進において更に大きな役割を果たすため、技術士であれば最低限備えるべき資質能力であり、今後も本分科会における制度検討を通じて、技術士制度に反映していくことが求められる。

1 専門的学識	1) 技術士が専門とする技術分野（技術部門）の業務に必要な、技術部門全般にわたる専門知識及び選択科目に関する専門知識を理解し応用すること。 2) 技術士の業務に必要な、我が国固有の法令等の制度及び社会・自然条件等に関する専門知識を理解し応用すること。
2 問題解決	1) 業務遂行上直面する複合的な問題に対して、これらの内容を明確にし、必要に応じてデータ・情報技術を活用して定義し、調査し、これらの背景に潜在する問題発生要因や制約要因を抽出し分析すること。 2) 複合的な問題に関して、多角的な視点を考慮し、ステークホルダーの意見を取り入れながら、相反する要求事項（必要性、機能性、技術的実現性、安全性、経済性等）、それらによって及ぼされる影響の重要度を考慮した上で、複数の選択肢を提起し、これらを踏まえた解決策を合理的に提案し、又は改善すること。
3 マネジメント	1) 業務の計画・実行・検証・是正（変更）等の過程において、品質、コスト、納期及び生産性とリスク対応に関する要求事項、又は成果物（製品、システム、施設、プロジェクト、サービス等）に係る要求事項の特性（必要性、機能性、技術的実現性、安全性、経済性等）を満たすことを目的として、人員・設備・金銭・情報等の資源を配分すること。
4 評価	1) 業務遂行上の各段階における結果、最終的に得られる成果やその波及効果を評価し、次段階や別の業務の改善に資すること。
5 コミュニケーション	1) 業務遂行にあたり、明確なデザインと現場感覚を持ち、多様な関係者の利害等を調整し取りまとめることに努めること。 2) 海外における業務に携わる際は、一定の語学力による業務上必要な意思疎通に加え、現地の社会的文化的多様性を理解し関係者との間で可能な限り協調すること。
6 リーダーシップ	1) 業務遂行にあたり、明確なデザインと現場感覚を持ち、多様な関係者の利害等を調整し取りまとめることに努めること。 2) 海外における業務に携わる際は、多様な価値観や能力を有する現地関係者とともに、プロジェクト等の事業や業務の遂行に努めること。
7 技術者倫理	1) 業務遂行にあたり、公衆の安全、健康及び福利を最優先に考慮した上で、社会、経済及び環境に対する影響を予見し、地球環境の保全等、次世代にわたる社会の持続可能な成果の達成を目指し、技術士としての使命、社会的地位及び職責を自覚し、倫理的に行動すること。 2) 業務履行上、関係法令等の制度が求めている事項を遵守し、文化的価値を尊重すること。 3) 業務履行上行う決定に際して、自らの業務及び責任の範囲を明確にし、これらの責任を負うこと。
8 継続研さん	1) CPD 活動を行い、コンピテンシーを維持・向上させ、新しい技術とともに絶えず変化し続ける仕事の性質に適応する能力を高めること。

参考文献：技術士に求められる資質能力（コンピテンシー）

平成 26 年 3 月 7 日 改訂 令和 5 年 1 月 25 日 科学技術・学術審議会 技術士分科会
（第 11 期技術士分科会における技術士制度改革の検討報告 令和 5 年 1 月 別紙 2）

(4) 日本技術士会が提示する「修習技術者に求められる資質能力」

日本技術士会の「修習技術者のための修習ガイドブック第3版」では、IEAのPCに相当する「修習技術者に求められる資質能力」として以下の図-参1が示されている。

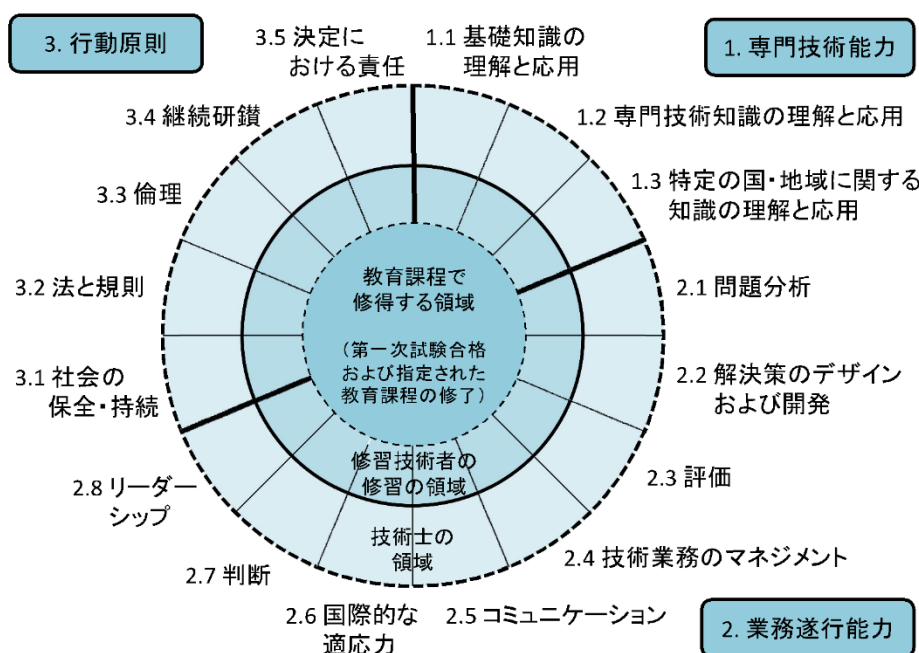


図-参1 日本技術士会が示す「修習技術者に求められる資質・能力」

【参考資料2】：IPD活動サイクルにおけるOODAループの活用

(1) エンジニアリングにおけるOODAループ

OODA（観察；Observe、情勢判断・行動の方向付け；Orient、意思決定；Decide、行動；Actの略）ループは、変化にいち早く対応して対策に取り組むための方法であり、ビジネス界では広く用いられている。エンジニアリング業務においても、OODAループの活用を推奨する。OODAループでは、プロセスの最後にあたる「行動（Act）」の結果は、直ちに次の「観察（Observe）」の段階で評価され、次の意思決定に反映することで、ループを描くこととなる。エンジニアリング業務では、「行動」の次に「省察」を入れ、次の業務に活かすこととする^{*15}。

①問題観察（Observe）

問題観察は、問題を取り巻く社会の状況、業務に関する理解、過去の事例の調査、最新技術の調査、法律・規制の調査、さらに問題を解決するエンジニアの能力（履修した知識、スキル、態度・姿勢、親和性など）の調査などの情報を総合的に集め、観察するプロセスである。

②情勢判断・行動の方向付け（Orient）

情勢判断は、自己の知識・能力の棚卸を行い、問題解決のために不足している知識・能力を習得し、SDGsの観点からの考察、リスクの設定などを行い、問題を解決するための方針を設定するプロセスである。

^{*15} OODAループ：<https://ja.wikipedia.org/wiki/OODA>

③意思決定（Decide）

意思決定は、リスク・安全性・SDGs等を考慮して、実行のための意思決定を行うプロセスである。

④行動（Act）

行動は、プロジェクトの実践、体制・プロセス・金・情報に関するマネジメント、進捗管理などを行うプロセスである。

⑤省察（Observe）

省察は、成果に対する省察と気づきを支援者と共有するプロセスである。

以上のOODAの流れを、技術業務を通じたPC獲得のプロセスとして次ページ図-参2に示す。

（2）IPD活動サイクルとOODAループの活用

IPD活動サイクルは、個別に評価可能なPCの要素を習得してPCを獲得するためのR（レビュー）、P（計画）、D（活動）、C（成果評価・省察）を繰り返し行うサイクルである。R⇒P⇒D⇒C各段階の実践にあたり、OODAループを活用することで、より活発なRPDCサイクルにすることができる。このIPD活動サイクルとOODAループの活用を次ページ図-参3に示す。

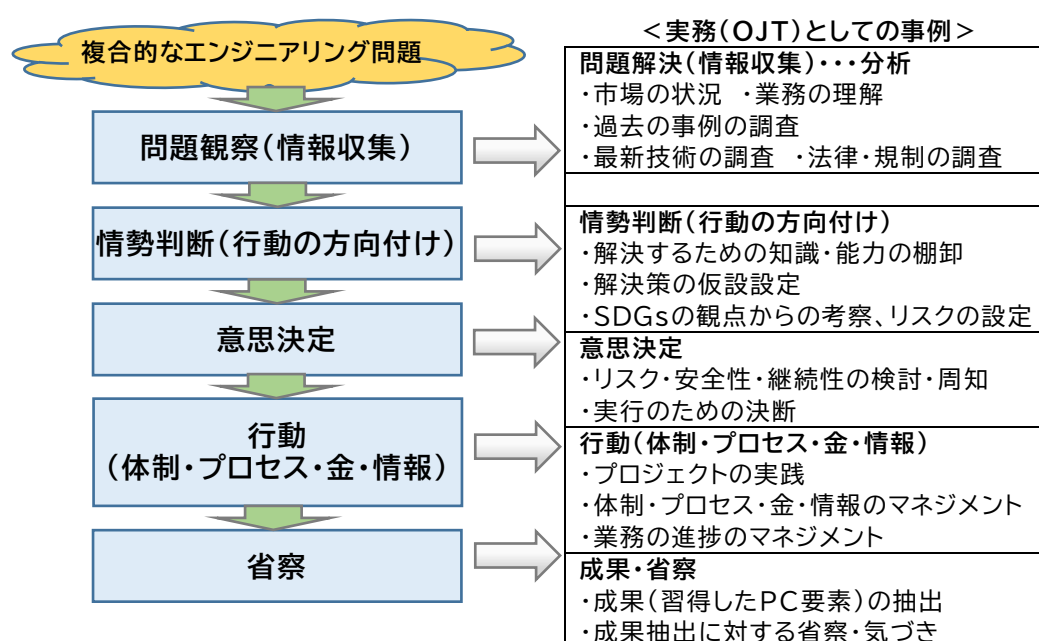


図-参2 技術業務を通じたPC獲得のプロセスと事例^{*16}

^{*16} IPD活動ガイドブック第1版（IPD研究会）より引用

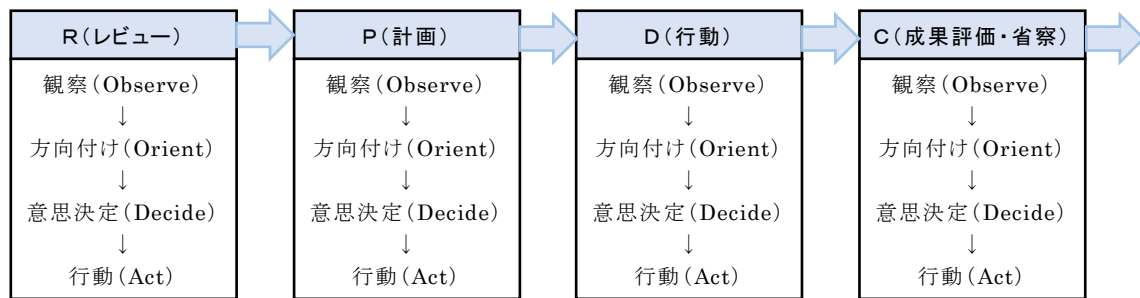


図-参 3 IPD 活動サイクルと OODA ループの活用^{*17}

^{*17} IPD 活動ガイドブック第1版 (IPD 研究会) より引用

IPD ワーキンググループ（第三期）メンバー一覧

氏 名	分類※ ¹	所属・技術士登録部門	備 考※ ²
池田 駿介*	継続	東京工業大学名誉教授	助言
菊川 律子*	新規	放送大学 副学長（当時）	2021/11 退任
中谷 多哉子*	新規	放送大学 教授	2021/11 就任 助言
津田 伸夫**	新規	上下水道、総合技術監理	全体調整
青木 規明	新規	経営工学、総合技術監理	活動 GB 査読
阿部 修一	新規	電気電子	活動 GB
有馬 宏和	新規	応用理学	2022/3 退任
池田 紀子	継続	応用理学、総合技術監理	支援 GB
奥田 榮司	継続	経営工学、総合技術監理	支援 GB
河野 恭彦	新規	原子力・放射線	国際視点
小林 進	継続	情報工学、総合技術監理	活動 GB
小林 守	継続	経営工学、情報工学、総合技術監理	活動 GB
佐々木 聡	新規	原子力・放射線	国際視点、IPD 意義
林 雅弘	新規	情報工学	支援 GB
松藤 洋照	継続	建設	2022/7 退任
松村 正明	継続	繊維	支援 GB
村田 裕子	新規	水産、総合技術監理	支援 GB
横井 弘文	継続	電気電子	国際視点・事例
*：学識経験者 **：代表 ※ ¹ 前期からの継続/新規加入の別 ※ ² 担当箇所と途中退任・就任			

※本ガイドブック(案)作成にあたり、日本技術士会登録グループ IPD 研究会の協力を得た。
活動シートの事例（表 3.2、3.3）は、IPD 研究会の葛西正浩氏、笹尾圭哉子氏、高橋健一氏、
永野澄氏、平塚由香里氏、からの提供に基づく。

IPD ワーキンググループ（第四期）メンバー一覧

氏 名	分類※ ¹	所属・技術士登録部門	備 考※ ²
池田 駿介*	継続	東京工業大学名誉教授	助言
中谷 多哉子*	継続	放送大学 教授	助言
石田 佳子**	新規	建設、衛生工学、総合技術監理	全体調整、支援 GB
阿部 修一	継続	電気電子	活動 GB
池田 紀子	継続	応用理学、総合技術監理	支援 GB
葛西 正浩	新規	機械	活動 GB
木村 礼夫	新規	建設、森林	支援 GB
小林 進	継続	情報工学、総合技術監理	支援 GB
小林 守	継続	経営工学、情報工学、総合技術監理	活動 GB
林 雅弘	継続	情報工学	支援 GB
松村 正明	継続	繊維	支援 GB
村上 令	新規	機械	活動 GB
村田 裕子	継続	水産、総合技術監理	活動 GB
横井 弘文	継続	電気電子	活動 GB
*：学識経験者 **：代表 ※ ¹ 前期からの継続/新規加入の別 ※ ² 担当箇所			

本書の著作権は、公益社団法人日本技術士会にあります。複製、無断転載などは禁止します。

なお、IPD 活動を実践するために複製や転載する必要がある場合には、日本技術士会研修委員会までご連絡をお願いします。また、本書に対するご意見は、日本技術士会研修委員会にお願いします。